同志社女子大学

FD レポート

Faculty Development

第 5 号

2012. 3.

CONTENTS

巻頭言◆

『FD レポート』第 5 号の刊行によせて …… 学長　加賀　裕郎　1

2011 年度 FD 講習会◆

講演『キャリア教育について考える』

…… 香川大学　教育・学生支援機構／大学教育開発センター准教授　葛城　浩一　3

2011 年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告◆

2011 年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告

…… 現代社会学部社会システム学科　石上　敬子　16

…… 表象文化学部日本語日本文学科　宮崎　三世

…… 生活科学部食物栄養科学科　今井　具子

本学 FD 推進事業について◆

教員による授業参観の実施報告

学芸学部「Intensive Reading Ⅱ」「Intensive Listening Ⅱ」

（飯田毅先生、佐伯林規江先生）の授業を参観して …… 教育・研究推進センター主任　三宅えり子　17

現代社会学部「京都・大阪の歴史地理」

（天野太郎先生）の授業を参観して …… 教育・研究推進センター主任　河江　優　18

薬学部「天然薬物資源学」（小西天二先生）の授業を参観して … 教育・研究推進センター主任　川崎　清史　19

表象文化学部「特殊講義 E（古典語学）」

（小林賢章先生）の授業を参観して …… 教育・研究推進センター主任　村木新次郎　20

生活科学部「調理科学Ⅱ」（村上恵先生）の授業を参観して …… 教育・研究推進センター主任　伊藤　節子　20

第 7 回 FD － YG 会の開催報告 …… 教育・研究推進センター主任　河江　優　22

第 8 回 FD － YG 会の開催報告 …… 教育・研究推進センター主任　伊藤　節子　24

FD 図書紹介『大学授業を活性化する方法』『学生と変える大学教育：FD を楽しむという発想』

『魅力ある授業のために 2 ―双方向型授業の取り組みを中心に―』 教育・研究推進センター主任　河江　優　26

FD 活動報告（2011 年度）◆

メルマガ「同女 FD ニュース」の発行報告◆

2012 年度 FD 事業の概要・日程◆

巻頭言◆

巻頭言　『FD レポート』第 5 号の刊行によせて

学長　**加賀　裕郎**

教育の充実を目標として教育開発推進センターが設立されたのは2006年 4 月でした。同センターから『FD レポート』創刊号が刊行されたのが2008年 3 月、その後、発行母体が教育・研究推進センターに代わってからも『FD レポート』の刊行が続き、早いもので、今回で第 5 号を出すことができる運びとなりました。関係各位のご協力に深く感謝申し上げる次第です。

FD という概念が導入されて久しく、また現在は大学院、大学、短期大学を通じて、FD が義務化されています。しかし FD が大学に浸透するには相当の時間がかかりました。その理由は大別して二つあると思います。第一は大学の長い歴史を通じて、大学は教育機関であるという自己認識をもってこなかったことです。第二に FD は教育改善を目的とした教員相互の組織的努力を含意しますが、この「組織的」という点に、大学は余り得手ではなかったということです。各々について簡単に振り返りつつ、現在、今述べた二つの点の変革が求められていることに言及したいと思います。

周知のように「大学」に相当する外国語の ‘university’, ‘Universität’, ‘université’ の語源は ‘universitas’ ですが、これは ‘union’ つまり「組合」を意味し、教育機関という意味は含まれていませんでした。中世の大学には必ず教員、学生各々の組合が組織されており、その組合が ‘universitas’ と呼ばれたわけです。‘college’ に相当する ‘collegium’ は「学寮」を意味し、やはり教育機関という意味は含まれていませんでした。ちなみに研究機関は ‘studium’ と呼ばれていました。

中世型大学は普遍主義を基礎としていました。例えば中世型大学の公用語はラテン語であって、それは日常言語としては使われなくなっていた死語であり、大学内でだけ通用することばでした。しかし逆から見れば、出身地は何処であってもラテン語をマスターしさえすれば、コミュニケーションが可能な普遍的学問共同体が形成されました。しかし近世以降、普遍主義に立脚した中世型の大学は形骸化していきました。

近代において大学が再生するのは、フンボルト的理念に立脚した大学が発展して以降です。中世型の大学は医学、法学、神学を修めて専門職業に就くことを目的とした職業専門教育中心でしたが、フンボルト型大学は基礎学術研究を行う研究大学でした。この大学モデルが19世紀、アメリカ合衆国に ‘research university’ として輸入され、やがて日本の大学モデルともなりました。フンボルト型大学もまた教育機関というより研究機関でした。しかも吉見俊哉(『大学とは何か』、岩波新書、2011年)が指摘するように、フンボルト型大学は中世型大学の普遍主義に対して特殊主義、具体的には国民国家やナショナリズムの発展と結びついていました。我が国の帝国大学令を援用すれば、大学は「国家に須要な」学術を研究する機関だったのです。

しかし現在、近代のフンボルト型大学を基礎づけた諸条件が揺らいできています。一つは特殊主義――国民国家やナショナリズム――が相対化されつつあることです。近代国家は領域的であり、絶えず線引きをし、閉じようとする傾向がありますが、グローバリゼーションの進展は、近代国家の領域性を内破しようとします。これはフンボルト型大学の基盤を揺るがします。それともう一つ、現代における大学進学率の上昇という要因があります。我が国の大学進学率は既に50％を超えています。しかしこれは先進国中、高いとは言えず、60パーセントの国もあり、さらに韓国では70％となっています。日本でも大学進学率は今後さらに上昇すると予想され、政府もその方向を後押ししているように見えます。近い将来、日本の四年制大学進学率も60％を超えると推測されます。そうなると、ごく普通の学力の学生が以前以上に入学す

ることになり、勢い、大学は教育機関の度を高めざるを得なくなります。こうして FD の推進は待ったなしの課題になりつつあります。

さて第二に FD が大学に浸透しにくかった理由として、教育改善の「組織的」努力が faculty に苦手だったことが挙げられます。大学は企業のような Gesellschaft として組織されたわけではなく、さりとて自生的な Gemeinschaft でもありません。元来それは、自営業者の利益保護組合あるいは互助組合という性格をもっていました。

しかし20世紀後半になると、大学は「知の企業体」（天野郁夫）という性格を強めてきました。そうなると大学は Gesellschaft 的性格を強めます。概して faculty は、これに抵抗します。この気持ちはよく分かります。何故なら大学人は独立自営の気概をもたないと続かないからです。しかしそれだけですと、大学が組織として何かをする、何かを目的とするということは不可能です。かつてはそれでも何とかなりましたが、現在のような少子化の時代、知のグローバル化の時代には、自営業者の互助組合であっては、やっていけません。大学も何らかの組織的努力を必要としており、ある程度 Gesellschaft 的性格をもたないといけません。FD は教育改善部門で、現在求められている組織的努力を実行に移すものです。

現在、FD が浸透しつつあるのは、大学の性格が変貌しつつあるマクロ的状況を背景としています。大学教員の方々も、そうした事情をご賢察のうえ、教育改善に努力して欲しいと考えております。

2011年度 FD 講習会◆

同志社女子大学
2011年度　FD 講習会次第

日　時　　2011年　9月14日（水）　16：00～18：30
場　所　　友和館　Y401多目的スペース

司　会
教育・研究推進センター所長
川﨑　祐子

1　開会の辞　　河野　健男　　教務部長
2　テ ー マ　　キャリア教育について考える
3　講演講師　　葛城　浩一　氏（香川大学　教育・学生支援機構　大学教育開発センター准教授）
4　グループワーク
5　質疑応答
6　閉会の辞　　加賀　裕郎　　学長

講演『キャリア教育について考える』

香川大学　教育・学生支援機構　大学教育開発センター准教授　**葛城　浩一**

（開会）

司会（川﨑所長）　2011年度の FD 講習会を始めます。プログラムに従い、開会のご挨拶を河野教務部長からお願いいたします。また、ご挨拶に引き続き５月に配布済みのキャリア教育の答申を今一度配布させていただきましたので、この答申内容にそって、特に第１章、第２章を中心にご説明頂くことになっております。それでは河野先生、どうぞよろしくお願いいたします。

河野教務部長　本日の集まりが、キャリア教育とは何か？　何を目指すものなのか？どういうものでなければならないか？　などについて、実り多い議論のきっかけになればと願っております。よろしくお願い申し上げます。

さて、キャリア教育は、ご存じのように、大学を卒業した社会人にふさわしい人格や学識・資格を持った学生を、大学が社会に対する品質保証として、しっかり育てていくことだと考えています。もともと大学は、昔から、健全なる市民教育を目指して参りました。しかし、最近は、大学のユニバーサル化が進み、誰でもが大学に入学するという実態が生まれてきました。その結果、学問的な興味が希薄な学生層も多々入学しています。ですから、こうした事態に対応して大学教育の質的向上を目指さないと、大学教育が教育効果を発揮できなくなってきています。キャリア教育は、その意味で、大学教育の改善を喚起していると考えております。たとえば答申の４ページには、キャリア教育を通じて自立した市民、社会人、職業人の育成を目指すと述べています。

また、７ページの「キャリア教育と職業教育」では、「キャリア教育は、特定の職業に就くために必要な知識や技能を習得させる、そのような職業教育とは異なる、より広義の概念である」と述べていますし、キャリア教育は、本学でキャリアサポートセンターが中心になって行っている就職支援の分野とも、いささか異なります。キャリア教育は、単なる職業教育のことではなく、社会に出た際に自立して生活したり、

いろいろな業界で活躍できるために必要な知識・技能や資質の育成を目指しているのです。ご理解いただいているかとは思いますが、キャリア教育のこうした認識が大変重要であると考えています。

答申では、本学における具体的なキャリア教育の推進策を、第３章で13項目の提言としてまとめています。キャリア教育を本学では来年（2012年）から実施する予定ですが、いきなり13項目すべてを実施することは困難ですので、努力すれば手が届きそうなところから具体的に歩み出したいと考えています。

たとえば「提言１」では、同女の学生に身につけてほしい「同志社女子大学の10の力」のうちの該当する項目を、全科目のシラバスしたがって専任教員はもとより嘱託講師の先生方のシラバスにも明示する、としています。略称がDWCLA10である「同志社女子大学の10の力」とは、ご承知のように、「１．分析力」「２．思考力」から「10. 自己実現力」までの、同女の学生が卒業までに習得しておくべき知識・技能や資質・態度などのことです。「10の力」は、中教審答申や文科省関連審議会・研究会の動向などを参照しつつ、本学のリベラルアーツ教育の伝統を十分に反映させて、まとめたものです。

具体的に言いますと、力点を置いて授業を進めたいDWCLA10の項目を二つから三つ程度選定して、担当している授業科目のシラバスで○をつけていただくということです。もちろん、何も考えずに○をつければ良いというものではなく、単元の構成や授業展開、それにふさわしい資料の精選などという授業組み立ての工夫と連動しませんと、内容が伴わないことになりますので、広い意味ではFD（Faculty Development）の展開そのものになると思っております。まずこれは、実現可能なキャリア教育の第一歩として位置づけております。

時間もなく13項目の提言のすべてを紹介することはできませんが、その他にもいろいろな指摘をしています。たとえば、「提言5」では、「キャリア意識形成、発展科目の増設」ということで、授業科目「大学生活とキャリアデザイン」に触れています。現在、この科目にはⅠとⅡがありますが、これを拡充してABCDの4科目にしたい。１年次から２年次にかけて４科目を履修することによって、早いうちに目的意識つまり大学でどのようなことを勉強し、将来どのような分野にいきたいのかを自覚して、学習に関する動機付けを強めたいというのが主旨です。

また、これに関連して、「基礎演習」にキャリア教育またはキャリアデザインのような要素を組み込むことも提言しております。「基礎演習」は、それぞれの学科で学科の目的・専門性に照らして、創意工夫をこらしながら、１年次の春学期に行っていることが多いのですが、ここに１コマでも２コマでもかまいませんが、キャリア教育の要素を組み込めないものだろうか、ということです。学生が、将来どのような分野に自分が進みたいのかをできるだけ早くかつ明確にできるような、いわば自分探しに関わる単元を１年次の基礎教育である「基礎演習」のなかで実現したいということです。

その他に、「副専攻」制度も提言しています。現在、他学科の学生が受講できる科目がたくさんあるわけですが、そのような他学科受講可能科目を分野系統立てて一定以上履修すると、たとえば「経済と経営」とか「女性と社会」などといった名称の「副専攻履修証明書」を発行するというアイデアです。このようなことを通じて、４年間の学習の動機付け、進路付けなどに寄与できればよいのではないか、と考えている次第です。

そのようなことで、提言はあわせて13個あります。先般の教授会でもお願いしましたが、各学科ごとに学科の目的や専門性に照らし合わせて、適合的なキャリア教育をお考えいただき、早いうちに実現をお願いしたいと考えています。そのようなことを考えるうえで、本日の葛城先生の講演やその後の議論が実り多いものになることを願っております。ありがとうございました。

司会（川﨑所長） 河野先生、どうもありがとうございました。

それでは引き続きまして、FD講習会に入らせていただきます。テーマは、「キャリア教育について考える」。これは大学設置基準の改正によりまして、今年４月から、このキャリア教育についての実施が義務化されたということを受けて、今年はこれを中心に先生方にお考えいただきたいということにしており

ます。

講師の紹介をさせていただきます。本日の講師は葛城浩一先生でございます。先生は、広島大学教育学部教育学科をご卒業になり、引き続き広島大学の教育学研究科を修了され、現在は香川大学教育開発センター講師から、教育・学生支援機構大学教育開発センター准教授、及び兼任として、教育学研究科教科教育専攻の准教授もされておられます。研究テーマは「ボーダーフリー大学に関する研究」、あるいは「大学生の学習活動に関する研究」などです。主な著書としては、「現代大学生の学生行動」など多数の著書を出していらっしゃいます。

今回、本学でのこのFD講習会をお引き受けいただくに際し事前に本学にお越しいただいて内容の相談をさせていただきました。ちょうど本学では答申が出たところでしたので、全国的な動向に終わることなく、同志社女子大学としてのキャリア教育をどのように考えるかというきっかけづくりになるような講習会にしたほうがいいのではないかということで、それも踏まえた形で講習をしていただけるということです。

今回は学科別に座っていただいて、ちょっとしたグループワークとして、先ほどの提言の中の１年次教育、あるいは基礎ゼミでわれわれがどのようなことを来年に向かって考えていくかというきっかけづくりも含めております。葛城先生のほうからは、全国的な大学での動向や香川大学での具体的な取り組み内容についてもご紹介いただけることになっております。

それでは葛城先生、どうぞよろしくお願いいたします。

葛城先生　香川大学の葛城と申します。今日はよろしくお願いいたします。

最初から拍手を頂けることはあまりないのですごくうれしいです。前に行った高専などで話をさせてもらったときに、グループワークをやってもらったのですが、そこでもうけんかのようなことが始まったので、こちらとしてはファシリテーターとしてどのように絡んでいいのかというところで、とても気まずい思いをしたこともありまして、最初からこのように和やかな雰囲気で始められるというのは、とても私も話しやすいですね。今日は40～50分ぐらい私のほうでお話をさせていただいたあとに、皆さんで30分程度のグループワークを予定しております。ご協力の程よろしくお願いいたします。

私は香川大学大学教育開発センターというところで准教授として勤めております。全学必修科目で、今は「人生とキャリア」という授業を担当しているのですが、その授業の担当と、その取りまとめの役割を担っております。私は、先ほどの紹介にもありましたように、必ずしもキャリア教育をプロパーとしてやってきたわけではないのですが、平成18年度に香川大学に赴任しまして、最初のミッションが、文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム、いわゆる現代GPというものでした。これに「申請しろ」と、来て間もない僕に対して副学長が言うわけです。それで一生懸命にそれから勉強をして、幸いにも採択された。その中で、その成果を踏まえて、学生支援GPや大学生の就業力育成GPに採択されて、その推進担当もやってきています。このようなGPは、かなりキャリア教育に関係するところが多いもので、この実務をやっている中でいろいろと考えること、勉強することがありまして、そのようなことも踏まえて今日お話させていただけたらというように考えております。

今日の構成です。今日は、「はじめに」というところから始まって、「若年労働層を巡る現状」、これをまず皆さんに理解してもらうところから始めたいと思います。そのあとに、「「キャリア教育」概念の定義」を確認いたしまして、「大学における「キャリア教育」」はどのようなものかを確認いたします。そのあとに、「「キャリア教育」の留意点と実践例」をご紹介したいと思います。ここまでで大体40～50分お話したいと思うのですが。そのあとに「同志社女子大学の「キャリア教育」を考える」ということで、先ほどありました基礎ゼミをどのようにするかとか、あるいは学科でのキャリア教育をどのようにするかというようなことに論点を絞ってグループワークをしていただけたらと考えております。

では、「若年労働層を巡る現状」というところから、まずは入っていきたいのですが。皆さん、お手元

にあるクリッカーが気になってしょうがないのではないでしょうか。ちょっとそれをお持ちください。今から若年労働層を巡る現状についての、いくつか問題を出します。それに対する皆さんの認識を確認するところから始めたいと考えております。初めてお使いになる方もいらっしゃると思いますので、練習問題を１問出します。それに対する回答から始めましょう。次に画面を移しますと、このへんに「７秒」という制限時間の画像が出てきます。７、６、５、４、３、２、１というように出てきますので、それが落ちきる前に、１番なら１番、２番なら２番、正解だと思う、あるいは自分がそのように思うボタンを押してください。この右肩にランプがつくようになっており、緑色がついていると、きちんと受信されましたということになっております。ですから次の練習問題のときに緑色が反応しなかった人は、後ろにある予備と交換していただいて、そのあとの本格的な問題に取り組んでいただくという形でいきたいと思います。

それでは練習問題です。回答状況は「クリッカーという言葉を聞いたことがある」という方は37％です。今日初めて聞かれた「ない」と答えられた方は63％います。

このクリッカーとは、学生が無線赤外線機能のついた送信機で回答を送るというもので、今皆さんにリアクションしてもらいました。リアルタイムで、皆さんの認識とか理解とか、そのようなものを確認しながら授業を進めるということで、今進んでいる大学ではかなり取り入れてやっているようです。

ここまでが練習問題です。ここからが本題ですので、皆さん頑張って回答してください。

それでは１問目です。「15歳から34歳までのフリーターは？」という問題です。何人いるでしょうという問題です。

はい、ありがとうございます。２番が多いです。約120万人ぐらいではないかということで、２番が一番多いのですが、答えは３番の約180万人です。皆さんの認識より少し多いということです。

一応確認しておきましょう。フリーターの数の推移なのですが、皆さんの手元にないので申し訳ないのですが、平成15年に217万人というところまでいって、それからは少し減少傾向にあるのですが、近年は大体180万人ぐらいで横ばいに推移しています。フリーターと聞くと、ではニートはどうなのだということになると思うのですが、上が若年無業者で、いわゆるニート群です。ニートに関しては、大体ここ10年ぐらいは63万人ぐらいで推移しているということです。

今フリーターの話をいたしましたが、この中には非正規雇用者というのは、定義上含まれておりません。では、「非正規雇用者はどのぐらいいるのでしょうか」というのが第２問目です。「15歳から24歳までの非正規雇用者の割合は？」という問題です。皆さんよろしくお願いします。

はい、答えが出たようです。30％が46％、40％が40％ということで、少し割れておりますが、答えは約30％。これは皆さんの認識にそれほどずれはないようです。

では、続けていきましょう。次に、「15歳から24歳までの完全失業率は？」、これについて見ていきましょう。はい、よろしくお願いします。

約10％というのが47％ということで、皆さん正解です。

少し確認しておきましょう。若年者の失業率、非正規雇用率の推移を示した図なのですが、まず非正規雇用率から見ていきましょう。非正規雇用率は、この棒グラフになります。この青いところが15歳から24歳の、いわゆる若年労働層ということですが、平成17年あたりに34.6％ぐらいまで上がったあと、少し減少傾向にあって、平成21年度時点では31.5％というところで今、推移しております。ですからフリーターであったりニートであったり、あるいは非正規雇用者というのは、必ずしも増加傾向にはない。ただ、高止まりしているということが言えるのではないかと思います。

一方の失業率です。失業率は、この折れ線グラフなのですが、平成15年ぐらいに10％を超えたのですが、そのあと少し景気が回復基調にありましたので、少し減少傾向にある。ただ、平成19年度あたりに例のリーマンショックを受けて、また景気が悪くなって、今9.6％と、10％に近い値まで失業率が増えているというところです。

失業率の裏返しが就職率になると思うのですが、「就職率は今どのぐらいでしょう」というところで、これはあくまでも卒業者に対する就職者の割合です。よろしくお願いします。

はい。では、見てみましょう。３番の、約70％ぐらいはいるのではないか。結構これはばらけました。約80％いるのではないかという方もいらっしゃいますが。この答えは、今約60％ということです。皆さんが考えている以上に就職率が悪いということがお分かりになるのではないかと思います。ただ、先ほども申しましたように、この就職率は卒業者に占める就職者の割合です。実際に就職希望者だけに絞りましたら91.8％ぐらいですので、それほど悪くはないのではないかという印象を持たれるかもしれません。ただ、昨年の読売新聞の記事ですと、就職留年者が今７万９千人いると言われていて、卒業予定者の７人に１人は留年しているというデータも出ております。ですから就職希望者を母数とした就職率が91.8％だからと言って、必ずしもそれがいい値であるとは限らないということです。

今、失業率とか就職率とかが悪化しているという状況の話をしてきましたが、せっかく手にした職を手放す学生も少なくありません。ということで、では最後に離職者、「新規学卒者（大卒）が３年以内に離職する割合は？」、これを最後によろしくお願いします。

少し制限時間が短かったですね。答えは、２番の約30％が一番多いということですが、皆さん正解です。30％、これは有名ですね。いわゆる七五三問題というもので、新規学卒者が３年以内に離職する割合は、大卒だと３割、高卒だと５割、中卒だと７割ということで、七五三問題と言われる所以です。

これを経年で見ますと、景気が良かろうが悪かろうが、やはりあまり変わらないです。景気がいいときに就職すると、もっといいところを探してという意識が働くでしょうし、悪いときに就職すれば、それはそれでいいところを探そうとして動くということがあって、この値自体はあまり変わらないということになります。

皆さん、お疲れさまでした。正解率はどのようでしたでしょうか。ここからは挙手をお願いしたいのですが、全問正解という方はいらっしゃいますか？おられたら手を挙げていただきたいのですが。おられませんか。では、４問正解の方？複数います。４人ぐらいいますか。６人ですね。社会システム学科は、これからの同志社女子大学のキャリア教育を担っていく人材が多数いらっしゃるのではないかと思います。

ということで、今皆さんにクリッカーを使っていただきながら、若年労働層を巡る現状を確認していきましたが、皆さんにお渡ししている資料には数字のところだけ抜いておりますので、もしよければ埋めておいていただけたらと思います。確認いたします。15歳から34歳までのフリーターは180万人です。15歳から24歳までの非正規雇用者の割合は30％です。15歳から24歳までの完全失業率は10％です。大卒者の就職率は60％です。新規学卒者が３年以内に離職する割合は大卒で30％です。このような現状から、学校から社会、職業への移行が円滑に行われていない、そのような問題意識がありまして、若年雇用対策としてキャリア教育というのが求められるようになってきたというのがここまでのお話です。

それでは、キャリア教育はどのようにして日本の政策の中に位置付いてきたのかというお話を簡単にいたしたいと思います。「２.「キャリア教育」概念の定義」ということですが、キャリア教育が教育関係の公的文書の中に初めて用いられたのは、今お示ししております、1999年の中央教育審議会答申、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」という答申です。この中でキャリア教育は、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義されました。ただ、このようにキャリア教育の定義付けはしたのですが、キャリアという概念自体を定義しているわけではないのです。ですからキャリア教育に対する多様な見解を生んで、教育現場に混乱を招くことになりました。

そのようなこともありまして、2004年に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」が出されます。ここにおいて初めて、キャリアという概念自体について定義がされる。ここではキャリアを、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」ととらえております。このような概念に基づいてこの報告書では、キ

ャリア教育を、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえて、端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義するに至りました。

この結果、政策的定義におけるキャリア教育の中核をなすものは、勤労観・職業観の育成になったわけです。ただ、その結果あまりにその勤労観・職業観が強く出すぎてしまった関係で、現在では社会的職業的自立のために必要な能力、この育成がやや軽視されてしまっていることが課題として挙がっております。

そうした課題も背景にしながら、2011年１月31日に、中央教育審議会から「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」という答申でキャリア教育の再定義がなされました。ここではキャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であると定義されております。この文章を見ていただいたら分かるように、「勤労観・職業観」という文字が消えていますね。

では、具体的にどのようなことを定義しているのかといいますと、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力に含まれる要素といたしましては、この答申では、「基礎的・基本的な知識・技能」「基礎的・汎用的能力」「論理的思考力・創造力」「意欲・態度及び価値観」「専門的な知識・技能」、この５つを挙げております。かなり雑多といいますか、ただ並べただけという感じもしないこともないのですが。この中で特に「基礎的・汎用的能力」については、仕事に就くことに焦点を当てて、さらに詳しく定義がなされております。「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」、この４つの能力に、「基礎的・汎用的能力」を整理しています。先ほどから申しております、「勤労観・職業観」というのは、この４番目の「意欲・態度及び価値観」に含まれています。

このようなところから分かるように、勤労観・職業観の育成がキャリア教育の中核をなすものでした。逆に存在感を増しているのが、「基礎的・汎用的能力」で、社会的・職業的自立に必要な能力を身につけさせようというところに概念の定義自体が動いていることがお分かりいただけるかと思います。

それでは、「大学における「キャリア教育」」というお話をしたいのですが。先ほど、政策文書の中で「キャリア教育」が初めて文言として出てきたのが、中央教育審議会の1999年の答申だったというお話をいたしました。この時点では、実は高等教育はキャリア教育の対象とされておりませんでした。審議過程でこのような文書が出ております。「いわゆるキャリア・エデュケーションを小学校段階から高等学校段階まで通じて行うということはもっと強調していい点ではないか」。つまり、1999年の時点では、まだキャリア教育は高等学校段階までのものと考えられていたということです。ただ、2000年には大学審議会答申、「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方」の中で、「キャリア教育を大学の教育課程全体の中に位置付けて実施していく必要がある」というように、高等教育段階でのキャリア教育の必要性が提言されることになりました。この答申を受けて、大学でもキャリアという概念が広がり始めることになったわけです。

これを後押ししたのが、国公私立を通した競争的環境の下で特色・個性ある取組への支援を行うGP事業で、現代的教育ニーズ取組支援プログラムにおいて、「実践的総合キャリア教育の推進」というテーマが設けられました。これは2006年度と2007年度の２年間に渡って実施されたのですが、2006年度は申請件数176件に対して採択件数が33件、2007年度は申請件数153件に対して採択件数が30件で、２割を切っている採択率です。ということで、キャリア教育に対する関心が加速度的に高まりました。この現代GPを通して、採択されれば採択されたでキャリア教育を進めますし、採択されなかったとしても次回は採択されようということで、この当時はGP獲得がステータスであったところもありましたので、キャリア教育に対する関心が現代GP事業を通して加速度的に高まっていったということでございます。そのあとキャリア教育関係では、大学教育・学生支援推進事業であったり、大学生の就業力育成支援事業であったり、このような事業が大学のキャリア教育に対する関心を引き続けているということになっております。

その後2010年には、大学設置基準が改正されました。「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」と、このようなことが設置基準で示されたわけです。これがいわゆる大学におけるキャリア教育の義務化というもので、今年度から大学の教育課程に職業指導を盛り込んでいくことが義務化されることになった文章になるわけです。

それでは、大学ではどのようなキャリア教育がなされているのかということを少し確認していきましょう。今示しているデータは2008年度のデータなのですが、2008年の時点でもうすでにキャリア教育を実施している大学は９割近くございます。国立で88％、公立で81％、私立では89％になっています。具体的にどのような取り組みがなされているかというところで見てみますと、多いのがやはり、「勤労観・職業観の育成を目的とした授業科目や特別講義等の開設」であったり、あるいは、「今後の将来の設計を目的とした授業科目や特別講義等の開設」です。これで少し少ないのが、「コミュニケーション能力、課題発見・解決能力、論理的思考力等の能力の育成を目的とした授業科目の開設」で44.9％です。特に注目していただきたいのは、その下です。「社会や経済の仕組み、労働者としての権利・義務等の知識の獲得・修得を目的とした授業科目の開設」で、これが３割を切っております。今ではこの部分に力を入れなければいけないとかなり言われております。

というのも、労働市場における弱者、つまり、非正規雇用者などが自分を守るすべを知らずに採用側に搾取されているという状況があって、東京大学の本田由紀先生は、「大学におけるキャリア教育は、労働市場への適応ばかり教えている。抵抗についても教えていかなければいけない」というようなことをおっしゃっています。「適応と抵抗はローマ字で書くと『i』の位置が違うだけなのに」というようなことをおっしゃっています。ということで、やはり勤労観・職業観を育成することはもちろん結構なのですが、そのように労働市場に適応させることだけではなくて、抵抗するすべを身につけさせることも、あわせて教えていかなければいけないということが、今とても意識されているところだと思います。

ここからは、「「キャリア教育」の留意点と実践例」というお話に移りたいと思います。先ほど紹介いたしました、中央教育審議会答申の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の中で、キャリア教育を充実させるためにはどのような方策が考えられるかということで示された８つの項目です。「各学校におけるキャリア教育に関する方針の明確化」から「効果的な実施のための体制整備」の8つが、この答申で示されておりますが、特に重要な点は上の２点ではないかと思います。一つ目が、「各学校におけるキャリア教育に関する方針の明確化」。同志社女子大学でいうと DWCLA10ということで答申を示しておりますので、この点については、同志社女子大学はクリアできていると考えられます。

もう一つは２番目ですね。「各学校の教育課程への適切な位置付けと計画性・体系性を持った展開」。各学校の教育課程にどのように位置付けるかということを考えるうえで、法政大学の児美川先生という方がおられるのですが、その先生の指摘を踏まえておかなければいけないと思います。少し長くなりますが読みます。「学校におけるキャリア教育は、大きく括れば、二層構造をなすはずだと考えている。広義には、学校における教育活動の全体を通じて、「キャリア教育としての視点」が貫かれる必要があるという、カリキュラム上の土台となる「層」がある。これに対して、狭義には、学校の教育課程のなかでは、とりわけ「生き方、働き方」の学習という点に焦点をあてた教育活動が取り組まれる必要がある。言ってみれば、広い意味でカリキュラム上の土台となる「層」のうえに重ねられるべき、キャリア教育の核となる「層」である」、このようなことをおっしゃっているわけです。この文章というのは、「学校」という表現がされていることからもお分かりのとおり、初等・中等教育を前提とした文章ではあるのですが、考え方としては高等教育についても同じだと思います。つまり、キャリア教育というのは、カリキュラム上土台となる層である広義のキャリア教育と、そのうえに重ねられるべきキャリア教育の核となる層である狭義のキャリア教育で構成されるべきだということをおっしゃられているわけです。

このカリキュラム上の土台となる層ということでいきますと、国際基督教大学元学長の絹川先生がこのようなことをおっしゃっております。これも少し長くなりますが読みます。「「教養」とは、いかに生きるかという人生の質を定める要因であることを考えれば、教養としての「キャリア開発」が大学の教育課程として積極的な意味を持たなければならない。「キャリア開発」は単なる職業選択の支援ではないのである。すなわち、キャリア開発プログラムは、直接に職業選択に有効な知識の提供を越えた展望の下で設計されることが求められる。例えば、キャリア開発プログラムは次のようにデザインされる。（1）自己理解と他者理解能力の育成、（2）世界理解能力の育成、（3）スキルと経験を獲得する能力の育成、（4）課題発見・解決能力の育成、（5）自己同一性の確立支援。このように書き出してみると、その内容は、教養教育にほかならない。というよりは、正統的教養教育こそが、「キャリア開発」プログラムの基盤でなければならない」というところまで言いきっておられるわけです。私は教養教育に対する造詣が深くありません。このあたりはあまりピンとこないのですが、リベラルなものを教育の柱とする同志社女子大学では、このような絹川先生のご発言等も踏まえたうえで、広義のキャリア教育が大学におけるキャリア教育活動全体を通じて行われる必要があるのかもしれません。

ちなみにどんぴしゃりではないのですが、東京女学館大学の取り組みを事例としてご紹介させていただきたいと思います。少し見づらいかもしれないので、私のほうで必要なところだけ読みます。「社会で必要とされる基礎力として、「10の底力」を設定し」、何か聞いたことがある話です。「すべての授業科目でこれらのうちどの能力を育成できるかを明確にした教育を行う取組を実施している」ということで、この東京女学館大学というのは、ディプロマポリシーをキャリア教育の観点で設定してカリキュラムマップを作成しているという取り組みをやっているわけです。先ほどの絹川先生の話からはかなり温度差があるようにも感じますが、このようにキャリア教育というのは、ゴールをどこに持っていくかによってかなり想定される内容が変わってくるということをご理解いただければよろしいかと思います。

ここまでは広義のキャリア教育のお話だったのですが、一方、キャリア教育の核となる狭義のキャリア教育、これについても考えていく必要がございます。これはつまり、キャリア関連科目をどのように開設していくかというお話です。同志社女子大学では、「大学生活とキャリアデザインⅠ」「大学生活とキャリアデザインⅡ」という科目が、すでに開設されておりますが、全国的にみるといろいろなタイトルがございます。キャリア関連科目の科目名は、「キャリア教育」から始まって、「キャリアカウンセリング基礎」「観光キャリア開発」「テクノキャリアゼミ」とかなり雑多な、きわめて多様な内容の科目が開設されております。

これでは少し分かりにくいので、授業内容を分類して整理したのがこの表です。京都産業大学の松高先生によれば、キャリア関連科目を内容分類しますと、「大学生活導入系」「社会理解系」「キャリア開発系」「就職対策系」と大きく4つに分類されます。現在のキャリア教育の動向を見ますと、やはりこの1番の「大学生活導入系」というところが、かなり比重が高くなっています。この図は、関西国際大学の濱名先生が、「キャリア教育」と、「初年次教育」や「リメディアル教育」、「導入教育」との関係性を示した図です。かなり「キャリア教育」と「初年次教育」「導入教育」が重なっていることがご理解いただけるのではないかと思います。つまり、キャリア教育では、学生が入学後比較的早期の段階からキャリア意識の醸成をするだけではなくて、学習への動機づけや基礎力の養成などを効果として狙っているということです。ただ、学生が入学後比較的早期の段階から、と言っても、そもそもそのころの学生がキャリア教育に対するニーズを持っているのかということはあるかと思います。

ということで、この点について香川大学の1年生を対象に調査を行いました。1年生全数調査です。「キャリア教育に対するニーズが、ありますか？ありませんか？」と聞きますと、「キャリア教育に対するニーズがある」と答えた学生は、1年生で半数にも達していないです。「キャリア教育に対するニーズがない」というのが半数を超えている。その「ニーズがない理由はなんですか？」と聞くと、「授業内容に興味・関心がない」、これが大半で44.9％います。あるいは、「明確に希望する進路が決まっている」、これが20％。

「１年次からキャリアのことを考えられない」というものが15％ぐらいいる。あるいは「キャリア教育の必要性自体を感じない」、これが１割ぐらいです。

では、このキャリア教育に対するニーズを感じている学生と感じていない学生で、キャリア意識にどのような違いが見られるのか。まとめているのがこの図です。先ほどのキャリア教育に対するニーズとキャリア意識との関連を分析した結果、どのようなことが言えるかといいますと、キャリア教育に対するニーズを感じている学生というのは、そうでない学生に比べて、総じて将来の職業生活における具体的展望や向上心を有しておりキャリア意識が高い。つまり、キャリア意識が高い学生がキャリア教育に対するニーズを感じているということです。ただ、キャリア教育に対するニーズを感じていない理由によってキャリア意識は大きく異なっているということも、結果として出てきました。つまり、明確に希望する進路があるからキャリア教育に対するニーズを感じないという学生は問題ないのですが、「授業内容に興味・関心がない」とか、あるいは、「１年次からキャリアのことを考えられない」、このようなことを理由にキャリア教育に対するニーズを感じていない学生というのは、キャリア意識が低い。当たり前と言っては当たり前と思われるかもしれませんが、そのようなことをデータで実際に示したということです。

このことからどのようなことが言えるかといいますと、選択科目としてキャリア関連科目が提供されている限りは、キャリア意識の低い学生をその対象とすることは非常に困難であるということです。つまり、選択科目として授業規模を拡大して単に履修可能な人数を増やすだけでは、問題は解決しないということです。

ちなみに同志社女子大学で、「大学生活とキャリアデザインⅠ」の受講生は400名弱ぐらいいます。「大学生活とキャリアデザインⅡ」の受講生は250名ぐらいいます。この数と先ほどのデータを照らし合わせたときに、同志社女子大学としてどのような選択をするのかということは、一つ考えておかなければいけないと感じます。

このような点については香川大学でも議論を重ねてまいりました。2005年の時点ではキャリア関連科目は１科目しかなかったのですが、現代 GP の採択であったり、学生支援 GP の採択であったり、就業力 GP の採択であったり、このようなことを通じてだんだん科目数が増えていって、今年度から12科目開講ということで全学必修科目になりました。先ほど私が、「キャリア教育を進めるうえで、どのような力を伸ばしたいのかというところがポイントになる」というお話をいたしました。香川大学ではどこにポイントを置いたかといいますと、今お手元にあるパンフレットを２ページめくっていただくと、水色のページが出てきますのでそこを読みます。「本学では、これまでも出口段階での「就職活動支援」はもちろんのこと、「低学年次からのキャリア教育」や「地域社会・地域企業と連携した実践的教育」等、就業力育成に力を注いできました。そうした取組を、学生の市民的責任感を鍵概念として整理・統合することにより、本学学生の就業力のさらなる向上を目指します」ということで、香川大学では学生の市民的責任感、これも学士力でよく出てくる言葉ですが、このようなところを鍵概念としてキャリア教育を進めて、このようなことを育成するために１年生を対象に必修科目を設定していったところです。

全国的に見れば、キャリア教育を香川大学のように必修化している大学というのは、大体３分の１ぐらいございます。国立では36.9％、公立では22.1％、私立では38.2％となっております。ただ、これは2010年に取られたデータですので、多分義務化されたあとは必修化されている割合も少し増えているのではないかと思います。ですから現時点ではもう少し高い値が出ているのではないかと思います。

では、必修化されている大学の事例をいくつか紹介したいと思います。武蔵野大学はもう2006年度の時点から、かなり精力的にキャリア教育を進めております。皆さんのお手元の資料では少し見づらいと思うのですが、武蔵野大学では、「キャリア開発科目」と言われるものだけで34科目開設しています。しかも、この下線が引かれているものはすべて必修です。では必修でどのようなことがやられているかということを、次のスライドに示しております。関係あるところだけを読んでいきます。「「キャリア開発基礎１」（リテラシー基礎）では文章力や漢字の力の向上を目指し、５回程度の添削が実施されている」。「キャリアデ

ザイン」は、「職業観・勤労観を涵養し、将来のライフプランと共に大学でのアクションプランを立てる」という授業。「ライフスタイルと職業」は、「現在現役で仕事をしている方から、職業観や勤労観などの話をオムニバス形式で聞き、その多様性を知るとともに自己の価値観を見直しする」授業。このような授業を必修として展開しているということです。内容自体は大したことないと思われる方もおられるかと思うのですが、これらが必修だというところが、かなり精力的にやっているという印象です。

最近元気のいい大学として、嘉悦大学という大学がございます。ここも必修科目をやっております。「1年次における通年必修の「基礎ゼミ」において、4年間の学生生活と、卒業後の自分を考え、大学で学ぶ目的意識や、大学生活における具体的な目標を学生に持たせる一連のプログラムを実施」しています。このような内容で、通年で必修科目を設定しているということです。コーチングであったり、ロジカルシンキングであったり、あるいはグループワークの技法、ブレインストーミングであったりKJ法であったり、ディベートであったり、このようなスキルを前期プログラムで習得したあと、後期は学祭の店出しをするまでのプロセスをずっとやっていくということのようです。細かい収支予算書を作成したりする中で経済のこと、経営的なことを学んでいくということなど、このようなプログラムを行っているということです。

これまで紹介してきたのは初年次教育における実践例、いわゆる教養教育、あるいは共通教育と呼ばれるところで展開されている実践例だったのですが、一方で専門分野における教育課程の中でのキャリア教育ももちろん展開されております。

筑波大学は、いわゆる教養科目、共通科目と呼ばれるところでもキャリア関連科目を開設している一方で、この左下の「学問と社会」というところですが、これは専門分野における教育課程の中で開講しているということです。「専門教育の一環として開講される科目。内容は教育組織ごとに異なるが、それぞれの分野における専門的学問領域と社会のつながりについて考える機会を提供される内容となっている。この科目を学ぶことを通じて、その専門分野を修めることが自分にとって、また社会にとってどのような意味を持つのかを考える機会となる」、このような科目群を専門教育の中に位置づけているわけです。

具体的にどのような科目が挙がっているのかというのが、次のスライドです。皆さんのお手元には2枚用意してあるので、一通り見ていただけるかとは思います。人間学群については理解できる感じがしますね。人文学類については、これがはたして本当にキャリア教育なのか、かなり怪しいのではないかと思います。これはきっと上からの命令で、そこに関連するような科目を挙げてこいというようなことになったため、結局そこの足並みがそろわないまま挙げてきた結果ではないか、とかってに推測しているところです。ただ、このような科目群を、「学問と社会」という傘のもとにおいたということは、意味のあることではないかと思います。

これまでキャリア教育のことについてお話してきたわけですが、私がこれまで話した内容を踏まえなくてもいいのですが、これから皆さんには、「同志社女子大学の「キャリア教育」を考える」ということでグループワークをしていただきたいと思っております。皆さんに与えられたミッションは以下のとおりです。「提言6（学科ごとに開設するキャリアデザイン科目）を受け、学科ごとに1年次にキャリアデザイン科目を新設することを前向きに検討することになりました。このときに、どのような内容や構成が考えられますか？それを阻害する要因としてどのようなものがありますか？」。この2点だけでなくてもいいです。いろいろなことをお考えになっておられる方もいらっしゃると思いますので、このようなことを少し踏まえながら、今から、5分間時間を取ります。5分間のうちに、皆さんのお手元にあるワークシートの「個人ワークメモ」というところに、「どのような内容や構成が考えられますか？それを阻害する要因としてどのようなものがありますか？」という点について少しご意見、お考えをおまとめいただけたらと思います。それではよろしくお願いします。

（グループワーク） ※グループワークの内容については「2011年度FD講習会実施報告書」として、2011年11月16日開催の教授会で配布し、周知をはかりました。

司会（川﨑所長） グループワーク、お疲れさまでした。あとでまた回収させていただきましたものを当センターのほうでまとめることができればと思っております。

それでは、質疑応答に入らせていただきます。葛城先生には、キャリアという言葉そのものの概念、キャリア教育の変遷と現状、全国でのいろいろな取り組み、香川大学での取り組みを非常に分かりやすくお話し頂けたと思います。何かここでご質問がありましたら、二三お受けしたいと思います。

若本先生 英語英文学科の若本と申します。今日は素晴らしいお話をありがとうございました。

先生からいろいろお話をお聞きしていて、香川大学での取り組みというのは素晴らしいと思ったのですけれども、ただ、どうでしょう？　先生のご実感として、このような、いわゆるキャリア教育というものを香川大学で導入されて、学生の意識とか行動とか、または卒業後の、例えば離職率が少し下がったとか、効果とか変化というものは、先生の実感として何かございますでしょうか。

葛城先生 ありがとうございます。キャリア教育の効果というお話だと思うのですが、一応効果検証もしております。まだ必修科目になる前は選択科目でしたので、キャリア教育を受けている学生と受けていない学生で、キャリア意識がどのように違うかという分析をいたしました。すると、キャリア意識の向上という点で、効果は一定程度見られるのですが、それが十分なものなのか、あるいはそのあとの学年進行に伴ってそれが引き続き持続的なものなのかどうかというところは怪しいところがあります。ただ、授業を受けたあとの一時点に限れば、確実に効果は見られるということです。

ただ、就職率に直結するかどうかというところでは、意識が上がった学生はまた違う世界が見えてきますので、一歩上のところをチャレンジしようとします。すると難しくて結局就職が振るわないということもありますので、なかなか就職率自体が向上するというところにはいかないのではないかという印象です。

漆谷先生 薬学部長の漆谷と申します。大変ためになる話をありがとうございました。

少し今日のお話とずれてしまうのですけれども、私は職務上、結構高校生に、模擬授業とか進路に関する説明に行きます。昔はこのようなことはなかったと思うのですが、高校生の時代から、職業の内容とか収入とかを説明させられるのです。今度行くところは中高一貫校なので中学生もいるのです。文科省がこのようなキャリア教育を義務化したというトレンドに合わせてくるのだと思うのですが、中高生にキャリア教育をするというようなことまでいっているのは、先生のお話を伺いますと、早ければ早いほどいいような感じなので、それを突き詰めると、もう小学校からキャリア教育ということになってくる。その風潮が個人的に私は反対なのですが、低学年化しているという点についてご意見を伺いたいです。

葛城先生 ありがとうございます。小学校段階からやれというようなことは、もう政策的には言われております。ただ、小学校の段階というのは、勤労感の醸成でいいと思うのですが、中学校・高校、あるいは高校に関しては、もっと職業的な内容を入れろというようなところで、今、有識者がものを言っているところです。つまり、先ほど申しました東京大学の本田由紀先生は、「普通科を減らして職業学科を増やすべきだ」というようなことや、「普通科を減らして職業学科を増やして学生を事実づけにすることが重要なのだ」というようなことを言っておられたりします。つまり、普通科の学生というのは、そのあとに歩むキャリアというのが職業学科の生徒よりも不利な、就職率にしても振るわないし、キャリア意識も低いというところで問題視されているという現状があってそのような言及に結びついているわけですけれど。そのような意味では、高校では、より専門性を強めていったほうがよいという動きに今後なっていくのではないかと感じております。

西村先生 生活科学部の西村でございます。

今おっしゃっているように職業学科を高校に増やしていくというのは、動機づけが明確になるのかも分かりません。でも、ドイツなどは、日本と比べても職業学校が多いです。ドイツでは、そのような動機づけの効果が、はたして上がっているのですか。日本に比べて、そのようなキャリアに対する動機づけとか、これから日本が目指そうとしている目的が達成されているのですか。

葛城先生　ドイツの職業教育の状況を見て、キャリア教育を進めようという議論になっているわけではないと思います。ただ、ドイツだけではなくて国際的に見て、やはり職業意識が低い、キャリア意識が低いということは、国際調査の結果などからも出ております。そのような結果に照らして、やはり高校段階でも専門性を高めていくような授業をしなければいけないという議論にはなっていると思います。

西村先生　グローバルな点から見ると、すでにやっている国があるわけです。そのようなところと比べて、本当に日本の学生さんたちのそのようなことが弱いのでしょうか？

葛城先生　国際比較の調査の結果では、弱いという結果が出ています。

西村先生　ありがとうございました。

司会（川﨑所長）　それでは時間も来ております。参加アンケートの一番最後に、このあとの情報交換会における質問票をつけております。葛城先生は非常にお忙しい先生で、これからまたとんぼ返りで香川にお帰りになられますが、情報交換会まではおつきあいいただけるということですので、ご質問があれば記入いただき、回収ボックスに入れていただければと思います。

それでは最後に、加賀学長に閉会の辞をよろしくお願いいたします。

加賀学長　どうも、今日は葛城先生、ありがとうございました。

フロアの先生たちも大変盛り上がっているようでございます。

私は今、仕事といいますか、キャリアにおける仕事に結構関心がありまして、ある科目の授業では２回必ずシラバスに入れておりました。ただ、アカデミックな授業ですので、古代ギリシャから、ジョン・ロックとか、マルクスの提言とか、あるいは20世紀ですとハンナ・アーレントだとか日本だと今村仁司さんとかそのようなものを取り上げながら授業をやっておりました。キャリア、仕事の問題は非常に私は重要な問題だと思っております。

ただ本学はリベラルアーツの大学ということになっております。伝統的な解釈ですと、リベラルアーツの大学は非職業的な人格形成を中心とした大学ということになっておりましたので、どちらかというとあまりキャリア教育には熱心でなかった。言い方に語弊があるかもしれませんが。そのようなところがありましたけれども、現代であれば、リベラルアーツあるいは教養概念には、キャリアデザインとかキャリア形成能力というものが含まれるようになってまいりました。職業教育と教養教育は対立するものではないという観点が今日の動向でございまして、だから同志社女子大学としても、キャリア教育は本当に大切なものであるということで、昨年キャリア教育のための WG に諮問したわけであります。

ただ、特に女子大ですので、女性としてエンパワーしていくという面も、私は大切にしていかなければいけないと思っております。また男性と比べても、女性の場合は結婚であるとか出産であるとか育児であるとか、様々な複雑なところがありますので、そのような問題を含めて女性のエンパワーメントということを中心に、キャリア教育も進めていっていただきたいと思っております。今日、このような機会を設けていただきましたので、ますます来年以降、そのような方向に進んでいただけると思って期待しているところでございます。

最後になりましたけれども、葛城先生、どうも今日はありがとうございました。

司会（川﨑所長） それでは、2011年度 FD 講習会をこれにて閉会といたします。ご参加いただきました先生方も、お忙しいところありがとうございました。

この後引き続き情報交換会を開催いたします。

なお、情報交換会は自由解散になっております。中ほどで先生方に書いていただいた質問票の中からいくつか葛城先生にお答えいただくことにしております。本日はどうもお疲れさまでした。

（事務局より）

※上記 FD 講習会講演関係資料のご希望がございましたら、教育・研究推進センター事務室までご連絡ください。

2011年度新任教員入社前オリエンテーションＦＤガイダンス開催報告◆

2011年度新任教員入社前オリエンテーションが2011年３月24日（木）に京田辺キャンパス知徳館261会議室において開催されました。毎年開催されるこのオリエンテーションでは、当センターも同志社女子大学の研究支援体制、研究論理、ＦＤガイダンスについて約90分の内容で説明を行っています。昨年度からは参加された教員に報告書を提出していただくことにしました。（本冊子に掲載可とされた教員のみ掲載）

現代社会学部　社会システム学科　**石上　敬子**

本学の基本組織、教育理念（特にキリスト教主義教育）、教育システムのほか、本学における研究支援体制、研究倫理について、およびFDガイダンスとして、４時間にわたり説明を受けた。本学で指導にあたる上での心構えについて、本学の歴史や担当官自身の経験を踏まえた含蓄のある薫陶を受けた他、本学の年間予定や学内の施設、必要な手続き等について、簡にして要を得た明快な説明を受けた。研究支援体制およびFDガイダンスは内容が複雑に及ぶところもあったが、詳細な添付資料により、よく理解することができた。

表象文化学部　日本語日本文学科　**宮﨑　三世**

同志社女子大学でお仕事を頂けることとなり、大きな喜びを感じて参りましたが、今回のオリエンテーションでは、大学のことをより詳しく知ることができ、私もまた大学を構成する一員として役に立ちたいという思いを新たにしました。このような機会を頂くことができ有難かったです。専門の知識を社会で役立てていけるかは専門外の俯瞰的な視点によっている、というお話がとりわけ印象が強く、「キリスト教主義」、「国際主義」、「リベラル・アーツ」という建学の精神について共感を強くしました。研究者としては、常に「素人」として研究に向かい新しい知見を見出していくことを励まされると同時に、研究だけではなく、教育はもちろん、大学の他の仕事に関わることができたらと考えます。オリエンテーションではまた、「FD」という大学の授業改革のための組織的な取り組みが存在し、活動が行われていることをうかがいました。今後新任社員として、ご支援を頂きながら、授業を充実したものに改善し続けたいと考えます。

生活科学部　食物栄養科学科　**今井　具子**

３月24日に新任教員入社前オリエンテーションに参加させていただきました。オリエンテーションでは学長からの挨拶に続いて、同志社女子大学のキリスト教主義教育や教育方針、研究支援体制・FD等について講義を受けました。同志社女子大学の創始者新島襄の教育に対する理念については、このオリエンテーションで初めて詳細を知ることができました。同志社大学ではキリスト教主義、自由主義、国際主義を通して、良心に満ちた青年の育成を建学の精神とし、人間性の育成に最も重きを置いていること。同志社女子大学ではキリスト教主義、国際主義、リベラル・アーツを教育の理念とし、幅広く深い教養を身につけることにより人間性を育み、社会に貢献する女性を育成するという女性としての特性を生かした教育理念を掲げていることに深く感銘を受けました。学生を丁寧に扱う大学の姿勢に、教育以前の人としてモラルの高さを感じました。このオリエンテーションは今まで大学教員としての身の置き方に悩み、暗中模索を続けていた私に一筋の光が見えた瞬間でもありました。新島襄が目指した理想の教育が脈々と受け継がれてきたことに対して畏敬の念を感じるとともに、これからの教員としてのあり方を考え、身の引き締まる思いがしました。

本学 FD 推進事業について◆

学芸学部「Intensive Reading Ⅱ」「Intensive Listening Ⅱ」（飯田毅先生、佐伯林規江先生）の授業を参観して

現代社会学部社会システム学科　**三宅　えり子**

2011年12月13日に、国際教養学科１年生対象の Intensive Listening II/Intensive Reading II の授業を参観しました。前半のリスニングは佐伯林規江先生が担当され、後半のリーディングは飯田毅先生が担当され、授業はすべて英語で行われました。まず全体として、両先生とも見事な英語で、英語教授法の視点から専門的配慮をほどこしてよく計画された授業をきびきびと行われておられたという印象を受けました。学生の間には全く私語はなく、それぞれが真剣に授業を受けている様子に感心しました。

前半の授業の最初に、４分間のボキャブラリー・テストが行われましたが、その答合わせをする際にも、佐伯先生は単に正解を言うだけでなく、英語で十分な説明をされた上で同義語などの補足説明もされましたので、学生はこの説明を聴くだけでも十分なリスニングの練習になっていました。

授業の中心部分は､留学先で起こりうるアカデミックな状況でのまとまった内容の会話を２種類聴かせ、それぞれの設問に答えることによって内容理解を深めるものでした。ここまでは、すべてコンピュータを通して行われました。その後、それぞれの会話内容を口頭で再生し、さらに宿題として会話の要旨や自分の意見を英語で書かせることで、英語理解力の定着をはかろうとしておられました。佐伯先生は終始一貫して笑顔で話しかけ、学生も楽しそうに反応していました。この授業は、留学中の英語の聴き取りと理解力の基礎を養うという授業目標にそって考えられたもので、優れた教材を効果的に使用して、熟練した指導法で授業をされていました。

後半の飯田先生のリーディングの授業では、先生のコメントつきの前回の英作文を返却し、その英作文の課題の復習から始まりました。そして、最初の活動として、ボキャブラリー・テストが行われました。このテストは各学生の前のモニターに設問が提示され、学生は解答を直接コンピュータに打ち込むようになっているので、飯田先生は正解数を見ながら解説をしておられました。

授業の中心部分としては、モニターにまとまった英文パラグラフとその内容に関する２つの設問を次々と提示しながら授業が展開されました。ボキャブラリー・テストの時と同様に、学生は解答を直接コンピュータに打ち込み、飯田先生は正答数を確認しながら必要に応じて日本語を効果的に使って、学生の理解を促すための的確な解説と英文読解のコツを、とても熱心に

指導されていたのが印象に残りました。真剣な中にも、時々ユーモアをまじえて和やかな雰囲気で授業がすすみました。

このたびは、佐伯・飯田両先生の、専門性が高く最先端のメディア機器を駆使して教育効果を高めるための工夫がされた熱意のこもった授業を参観させていただき、たいへんに感銘を受けました。このような授業を受けた学生は、留学先の大学で良い成果を上げることと期待しています。両先生に、授業参観の機会を与えていただきましたことに心から感謝申し上げます。

現代社会学部「京都・大阪の歴史地理」(天野太郎先生)の授業を参観して

教育・研究推進センター主任　**河江　優**

今回参観させて頂いた授業は、歴史地理学がご専門の天野太郎先生による「京都・大阪の歴史地理」です。200名もの履修者がいるとのことで、大講義室は熱気にあふれていました。通常の授業では明治時代の地形図を元に学生が作業を行っているとのことですが、単発のテーマ「地図と地名解釈」での講義でした。“飛鳥”“近江”などといった、普段身近な地名の由来に関してのお話に、学生は大変集中して聴いている様子が伺えました。大勢の学生を90分間お話だけで引き付けておく先生の手腕は相当なものとお見受けしました。話の組み立てや言い回しが実に上手く、専門的な内容ながら大変理解し易い印象を持ちました。先生の声のトーンは明瞭で張りがあり、間の取り方も絶妙でした。授業は大型スクリーンに映し出される資料を中心に進められましたが、色遣いやちょっとしたカットなどにも先生の配慮が感じられ、学生の心を引きつけるのに充分でした。途中、説明のために板書が必要な時には、一旦スクリーンを除けなければならないのですが、その手間さえも何か小気味よいテンポが感じられました。

授業開始間もない頃に、少しざわざわしている学生の一群がいましたが、天野先生は「何か質問ですか」と問いかけられ、単に「私語」と決めてかからないように配慮されていました。実際、単なる私語か質問か瞬時に判断できない場面が多いものです。一つ心残りがあるとすれば、参観者用の席が教室の一番前の方に用意されていたため、授業中頻繁に後ろを振り返って学生達の反応を細かく観察することができなかったことです。(振り返る隙もないほどお話が面白く充実していたこともありますが)

昨今巷では様々な授業スタイルの試みがなされていますが、中には従来の講義型授業を否定してしまうかのような意見も聞かれます。今回の天野先生の授業を参観して、講義型授業のスキルを向上させることも教員にはまた必要なことと思いを新たにしました。このような興味深い授業を行って頂いた天野先生に深く感謝申し上げます。

薬学部「天然薬物資源学」（小西天二先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任　**川崎　清史**

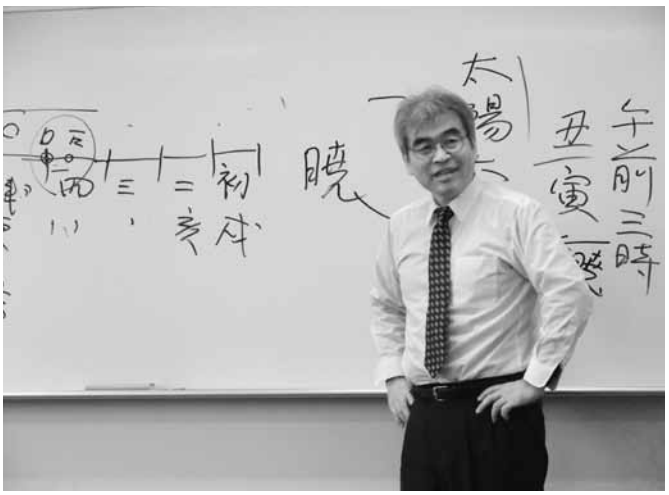
薬学部では多くの科目が必修科目になっています。その理由は学生の興味を伸ばすよりも薬学部コアカリキュラムや薬剤師国家試験に対応する内容をこなしていくことが優先されるので画一的な教育が必要だからである、と私は理解しています。したがって、授業を受ける学生は必ずしも授業内容に興味があるわけではないので、学生にいかに興味を持たせて授業を行うかが課題の一つとなっていると感じています。天然薬物資源学の授業目標はシラバスによると天然薬物および生薬を正しく利用し疾病の治療に有効な薬物を提供するために、薬用植物の基本的な分類、外部形態的特徴、薬用部位、特徴的な成分および生薬に関する概論・各論を学習することです。そしてこれらの内容は薬学部コアカリキュラムに対応しており、薬学部の典型的な講義科目の一つとなっています。この講義の授業形式と学生の受講態度がどのようなものであるか、そして薬学部の典型的講義科目の授業スタイルとして何か参考にできるものはないか、という観点で授業参観に参加しました。

小西先生は記名表を配布することにより出席をとっていました。私の場合は講義形式の授業の場合、学生の自主性に任せているのであえて出欠をとらない方針なので、まず出欠をとることが印象的でした。そのせいか授業に出席する学生数は多く、出席率は高いように思われました。また、授業の最後にだけやってきて記名表の記入だけするような学生がいるかがか気になるところですが、一番後ろで授業を見ている限り、そのような学生はほとんどいないようでした。

授業は基本的に教科書に沿って行われていました。学生に教科書のページ数を示してその内容を口述し、必要に応じて説明を板書するスタイルでした。教科書に沿った授業は学生の予習復習を容易にするだけでなく、教えるべき内容をすべてカバーする上で効果があると思います。しかし、教科書を後で読めば内容はわかるので授業に学生が出席しなくなることが危惧されますが、その点は記名表の配布でカバーしているのだと理解しました。ところで、出席をとると出席目当てで受講する学生の私語がうるさくて本当に授業を受けたい学生の学習が妨害されることが懸念されます。しかし、この授業では皆が比較的静かに聴講しており、静粛な授業環境が保たれていました。小西先生の講義力が優れているので学生に興味を持たせることができているのだと感じました。１時間30分の授業は長丁場なので、学生が授業に興味があっても学生の集中力が途切れて学生がざわつくような雰囲気になることがありがちですが、この講義では最後まで学生が熱心に受講していました。静粛にするための特別な工夫は見当たらなかったので、授業内容の面白さ、説明のわかりやすさ、など良い授業が行われていることが理由になっているのだろうと感じられました。はっきりとした口調でわかりやすい説明を行うことが講義の基本であることを再認識させられる授業参観でした。

表象文化学部「特殊講義Ｅ（古典語学）」（小林賢章先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任　**村木　新次郎**



大学にも熱血教師がいるものだと感じた。小林先生が教育に熱いことは、同僚として日ごろ感じてはいたし、学生からもれつたわってくる情報からも知っているつもりであった。先生の授業に参加して、熱い授業を目の当たり体験した。受講生は7人であり、講義というより演習のスタイルである。テーマは小林先生が最も得意とする平安時代の時をあらわす語彙、とりわけ一日の時間帯をあらわす単語群に関するもの。すでに学習したことを確認するところからはじまり、先行研究に言及し、それらが正しくないことを説くという、専門性の高い内容であった。『和漢朗詠集』の一節をとりあげ、ほとんどの注釈書は先行するものを無批判に継承しているという。小林先生はそれらに鋭い批判をくわえる。「『広辞苑』は参考にするな」（基本的に、わたしも賛成）、「○○の説はまちがっている」など、はっきりと言い切る姿勢は、研究の世界への挑戦であり、聞くものにとって刺激的である。平安時代の「あけがた」などの単語を論じて、舞台は、中国の北京や長安にもとぶ。とにかく、スケールが大きい。

授業の展開には、レベルの高さをたもちつつ、学生の関心をひきよせるように工夫がこらされている。解説の合間合間に学生に問いかけをする。問いかけの多くは、すでに学習したことへの確認であり、フィードバックが効果的になされている。ただし、学生の反応は、小林先生の期待値には達していないようにおもわれた（いずこも同じ）。名前を呼ぶときは、呼び捨てである（わたしにはできない）。教員と学生のあいだの距離は近く、信頼関係がなりたっていることがうかがえる。先生の声はよく通り、説明にはメリハリがあり、たとえ、大人数でも、同様の授業が可能なのだろうとおもった（わたしは、その対極にある）。

生活科学部「調理科学Ⅱ」（村上恵先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任　**伊藤　節子**

参観させていただいた授業のテーマは、「調理操作による栄養成分の変化」と「調理操作による物性の変化」であった。

調理操作による栄養成分の変化については、現代の食生活で取りすぎの傾向にあるエネルギー、脂質、食塩の摂取の減らし方のコツや無機質やビタミン類の調理法による残存率の違いについて講義された。魚一切れを調理した場合でも焼き物と揚げ物、さらにソースの違いにより摂取エネルギーには４倍もの差があること、材料の切り方の違いにより吸油率には10倍近い差が出ること、またおいしいと感じる塩分濃度も異なってくること、だしをしっかりととると塩味をしっかりと感じることができるなど、生活習慣病の食事指導にそのまま生かすことのできるような内容であった。この授業は食物科学専攻の学生相手のものであったが、管理栄養士としての村上先生からの強いメッセージが出されているように感じた。「試験」

のためではなく、学生自身と家族の健康のために日常生活の中で生かして欲しい内容であった。

授業アンケートの結果から「教員の話し方がとても聞き取りやすい」の項目をはじめとして学生の高い授業評価を受けておられる村上先生に是非にとお願いして参観をさせていただいた。期待通りの講義で、９名の参観者全員が異口同音に分かりやすい、聞き取りやすいと感想を述べておられた。配布された資料も充実しており、たとえ授業中に100％は理解できなかった場合でも資料を見ながら復習をすれば（ここが問題であるが）しっかりと理解できるようになっていた。放射線物質の食品の調理。加工による除去率のデータなど現在のトピックスも取り入れ、学生の興味を引くように工夫されていた。

学生にとって分かりやすい講義がどのようなものであるのかがよくわかりました。授業参観をお引き受けいただき、講義していただいた村上先生に心から感謝申し上げます。
ありがとうございました。

第７回 FD － YG 会の開催報告

教育・研究推進センター主任　**河江　優**

開催日程：2011年７月20日（水）17：00～19：00
開催場所：京田辺キャンパス　知徳館 C421会議室

第７回の FD-YG 会は、「どうする？キャリア教育」をテーマとした。「キャリア教育」とは、卒業後に必要な社会人や職業人としての基礎的な資質や能力の育成のことである。2011年度より全国の大学・短大教育でこれが義務化されたことを受け、本学のキャリア教育の在り方及びその実施方法について、2011年３月31日付文書「本学のキャリア教育の在り方及びその実施方法について（答申）」が出された。今回の YG 会では、この文書（以下「答申」と略）に基づき、意見交換を行った。参加教員は音楽学科、社会システム学科、医療薬学科、英語英文学科、日本語日本文学科、人間生活学科、食物栄養科学科の教員15名と学長であった。

「答申」において、本学のキャリア教育の具体的な取り組みの一つとして、DWCLA10（同志社女子大学の学生に卒業までに身につけさせたい10の能力）を挙げている。DWCLA10はそれぞれ、1. 分析力　2. 思考力　3. 創造力　4. プレゼンテーション力　5. コミュニケーション力　6. リーダーシップ　7. 思いやる力　8. 変化対応力　9. 自己管理力　10. 自己実現力　という内容であるが、これについて以下のような意見交換を行った。

・DWCLA10について、どのような経緯でこの原案になったのか。
・原案は教務課が作成し、既に栄光会で教務部長がシラバスに記載することも含めて言及している。
・「リーダーシップ」について、学生全員が必ずしも将来リーダーにならなくてもよいのではないか。
・女子大学教育として「リーダーシップ」は重要な要素。たとえ数人の集団であっても必要な力。
・「リーダーシップ」は DWCLA10の10番目に置いた方がよいのではないか。
・DWCLA10の順番に関して、1. 分析力　2. 思考力　3. 創造力となっているが、学習の段階に沿って考えるならば、1. 思考力　2. 創造力　3. 分析力とすべきではないか。
・ここに挙げられている以外に、例えばアントレプレナーシップ（起業家精神）や企画力も重要だと思う。
・これら10個の項目で内容が重複しているものはないか、より精査すべきだと思う。

この「答申」では「具体的提言」として、個々の科目において DWCLA10のどの能力を獲得することが出来るかを、2012年度よりシラバス上に表示することが提唱されている。これについて、以下のような議論が行われた。

・各学科の授業内容によって、実施の難易に差がある。また、シラバス記載は英語英文学科ではネイティブ教員への浸透などが難しい。
・PBL（Project/Problem Based Learning）は食物栄養科学科では難しい。各学科の状況に応じて実施すべき。
・今まで授業で行ってきたことがキャリア教育につながっていた事を再認識することも意義がある。教員がそれを再認識するためにシラバスへ表示することも重要。
・そうであれば、「キャリア教育」という言い方をしなくてもよいのではないか。
・シラバスへ記載する事で学生も意識するので、良い事ではないか。
・授業アンケートなどで達成度を確認出来るよう、関連付けることが必要ではないか。
・在学生アンケートの方で総合的に確認することも出来るのではないか。

「答申」で挙げられているその他の「具体的提言」に関して、また「キャリア教育」の視点から見た、現行の授業での問題点などを話し合い、以下のような意見があった。

・基礎ゼミを初年次から実施させることは重要。
・日本はキャリア教育が立ち遅れている。アジアの他の国と比べても我が国の学生の意識は低い。
・本学のこれまでのキャリア教育では、社会性とリーダーシップの意識が低いことを感じる。
・同志社大学で行われているプロジェクト科目を本学にも新設することは、良い事である。学生がこれを実践するには、全ての「～力」が含まれてくるため、DWCLA10よりも実践的だと思う。
・ディベートやスピーチコンテストなど、学内のイベントを開催する事も有効な手段。
・提言として、「英語教育の高度化」が挙げられているが、例えば少人数制の実施には TA や教員などスタッフの数も必要である。果たしてどこまで可能か。
・院生による TA より、学部生による SA の方が重要だと思う。
・薬学部 6 年次の特論科目を担当しているが、かなり高度な内容にもかかわらず学生の理解度が良いと感じるのは、5 年次の実務実習で医療現場を把握してきていることが大きいと思う。
・英語英文学科のキャリア科目「Career Introduction」（1 年次秋）では、卒業生やゲストスピーカーを呼ぶことで学生の意識も変わってくる効果を感じている。
・グループワークはだれてしまうが、将来を意識すると効果が上がるようだ。
・学生の能力、理解力に差があり、受け止め方や機敏さが異なることを感じる。学生に対する勉強への動機付けを図ることがポイントである。

この「答申」に挙げられた具体的な取り組みについては、キャリア教育委員会で今後検討していくことになっているが、今回の YG 会で多くの意見が出されたことは、大変有意義であったと思う。

第８回 FD － YG 会の開催報告

教育・研究推進センター主任　**伊藤　節子**

開催日程：2012年２月24日（金）13:00～14:20
開催場所：今出川キャンパス　ジェームズ館206号室

第８回の FD-YG 会は、テーマを「大学院の FD を考える」としてこの会で初めて大学院の FD を取り上げた。同志社女子大学大学院は現時点では文学研究科（英語英文学専攻、日本語日本文化専攻、情報文化専攻）、国際社会システム研究科（国際社会システム専攻）、生活科学研究科（生活デザイン専攻、食物栄養科学専攻）の３研究科６専攻があり、食物栄養科学専攻はさらに食物栄養科学コースと臨床栄養学コースの２コースに分かれている。英語英文学専攻と日本語日本文化専攻には博士課程（後期）が設置されているが、他の４専攻は修士課程のみ設置されている。さらに、2012年４月からは４年制の薬学研究科（医療薬学専攻）博士課程が設置される。学生も学部生からそのまま大学院に進むもの、社会人入学するもの、外国人留学生など多彩であり、年齢も20代から50代までさまざまである。

このようにシステム上も、また学ぶ学生も多彩であるため、大学院任用教授でも他研究科の大学院の実情は全く知らないのが現状である。そこで今回は初めて大学院の FD を取り上げる FD-YG 会であるので、会の原点にもどり「ワイワイガヤガヤ」と話すことにより今後の検討課題を見つけることを目的とした。

初めての試みとして院生の参加を呼びかけ、生活科学研究科食物栄養科学専攻食物栄養科学コースのＭ２生の参加を得ることができた。参加教員は９名であった。各研究科の実情とそれに対する思いを院生と教員から語っていただいた。

よい点もあげられたが多くの問題点が提起された。主なものを３点にまとめて報告する。

１）院生数が少ないこと

定員が少ない上、その定員も満たされていないのが現状である。文学研究科英語英文学専攻ではセメスター制を導入し、生活科学研究科では夜間開講科目を設置するなど履修しやすくなる工夫をしている。

講義は教員：学生＝１：１～数人の小単位となり、メリットもデメリットもある。

院生：院生に合わせた授業や実験を取り入れてもらえるメリットがあった。

教員：対象が１人でも多人数でも準備に要する時間は同じである。とくに夜間開講では負担が大きく、翌朝の授業への影響も皆無ではない。

２）設備と研究費

院生の講義室はあるがたまり場がない。

食物栄養科学コース院生の実験室も学部生と共用である。これは設備としての不十分さを示しているが、後輩を指導するチャンスでもある。

院生１人あたりに支給される予算が少なく、食物栄養科学コースの実験を行うためには教員が自分で外部資金を確保する必要があるのが現状である。

３）修了後にキャリアとして生かすこと、ポストを得ることが難しい。

すべての研究科に共通する悩みであるがとくに文系の大学院では社会活動の場が教育現場主体であるためポストを得ることが極めて難しいのが現状である。

食物栄養科学科でも大学院での研究が生かせるポストは少なく、院卒が必ずしも就職に有利となるとは限らない。今回参加していただいた院生はゼミの研究を開始してから実験による研究の面白さに目覚め、管理栄養士の資格を持ちながら実験系である食物栄養科学コースに進んだ。２年間で成果をあげ、４月より管理栄養士としての資格が必要な研究職に就くことが決まっている。これは最も理想的なコースで

あるといえる。幸いにも食物栄養科学科では臨床栄養学コースの院生も資格を生かして就職できている。指導教授の紹介によることもあるがほとんどの場合には本人の資質と努力によるものである。

以上が今回「ワイワイガヤガヤ」と話されたことの主な内容である。今後の検討の資料として中央教育審議会の第74回総会において取りまとめられた「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～答申」について文科省のHP上に発表された概要とポイントを印刷した物を資料として配布した。今後も大学院のFDがFD-YG会で取り上げられることを期待して会を終了した。

FD 図書紹介
『大学授業を活性化する方法』
杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編著（玉川大学出版部）2004年
『学生と変える大学教育：FD を楽しむという発想』
清水亮・橋本勝・松本美奈編著（ナカニシヤ出版）2009年
『魅力ある授業のために 2　―双方向型授業の取り組みを中心に―』
大阪大学教育実践センター編（大阪大学出版会）2010年

教育・研究推進センター主任　**河江　優**

私は音楽学科の演奏専攻で実技レッスン、即ち学生と一対一形式の授業を主に担当している。FD という考えが学生の集団との関係を前提にしているため、個人レッスンを行う教員にとって FD をどのように実践していくべきか、以前から課題となっている。私見では、実技系の FD を考える際には授業形態そのものの工夫だけでなく、コーチング、カウンセリングといったものの素養を高めていくことも必要になってくると思われる。今回原稿を書くにあたり、まず音楽実技のレッスンに特化された FD 図書を探したが、見つけることができなかった。そこで一般の FD 図書のなかにもヒントが隠されているかもしれないと考え、『大学授業を活性化する方法』を手にした。これは教育心理学の立場から授業改善に取り組んだ 4 人の教員による実例集である。全体は、Ⅰ「学生の参加を促す多人数授業」Ⅱ「協同学習のすすめ」Ⅲ「対話による学習モデル―LTD 話し合い学習法」Ⅳ「コンピュータを利用した協調的な知識構成活動」の 4 つの章からなり、いずれも授業の事例紹介だけでなく、その発想の根拠が示されているのが特長である。最初の三章には教員が授業を工夫して行い、学生の評価を受けて更なる改善を重ねていく様子が記されている。

音楽実技の個人レッスンでは、個々の学生に応じたきめ細やかな指導が出来る反面、他の学生から刺激を受ける機会が少ない。そこで本書にある協同学習のような、複数の学生同士が影響しあうレッスン形式を取ることも一考かと思う。しかし単に学生を集めて話し合いをさせるだけではその場がうまく機能しない。本書に述べられているように、課題の明示、学生側の準備の重要性、話し合う上での役割分担、教員による雰囲気作り、話し合いの時間配分など多岐に渡って教員は考えに入れておかなければならない。一方、ここに記された様々な授業形態をそのまま取り入れる事には限界があるが、その点第Ⅳ章では指導の際心に留めて置くべき理論が記されていて興味深い。筆者（東大の三宅先生）は保育園の園児達が氷作りのメカニズムを発見していく話を引き合いに出して、協調的な学習環境やカリキュラムを実践するために満たされるべき 6 つの条件―①目的の共有②初期仮説③多様な解法や結果の公開、共有④結果の統合（理論作り）⑤多様な理論の公開、共有、統合⑥協調の文化の形成―を挙げている。更に米国の研究者による「正統的周辺参加」という考えを引き合いに、この理論を学校教育システムに応用した 4 つの提言を挙げている。学生が主体的に知識を作るということはどういうことか、その元のところの理論を教員が意識する事で学生にとってのみならず教員にとっても教えることが楽しくなるような気がする。

次に、より広く全国の大学における FD の動向を知るために「学生と変える大学教育」（ナカニシヤ出版）を読んでみた。FD が義務化されたのが2008年、本書は時期的にちょうどそれを受ける形で刊行されたものだろう。「学生と変える」というタイトルの意味するところは、往々にして自らの教授法を変えることと考えられてきた授業改善を、「学びの主権者」としての学生と共に授業改善を推進していくという発想へ転換しようということらしい。全体は 4 つの部分から成り、大学教員のみならず、学生、そして FD を取材した新聞記者ら総勢17名の執筆者によって、大学教育の現状、FD の再構築、具体的な取り組み例、

FDの将来などといった、様々な視座でFDが論じられている。興味を持った箇所は多々あるが、例えば岡山大学で行われている学生と職員、教員が協同でFDを推進するシステムについてである。それを読むと本学でも授業アンケートだけでなく、よりオープンな形で学生が積極的に授業改善を働きかけることがあってもよいのではないかと感じた。一方、本書で紹介されている授業工夫の例も確かに素晴らしいものだが、もう少し身近なところの様子も知りたく思った。そこで手にしたのが、阪大のFD実践例『魅力ある授業のために2　―双方向型授業の取り組みを中心に―』である。これは小冊子といった体裁であり、阪大FDのPRも兼ねているのだろう。基礎セミナーやPBL、クリッカーを用いた授業など、実際に行われている授業の紹介に加え、それぞれのメリット、デメリット、学生の評価からの反省も併せて記されている。また、阪大では教員及び学生の評価が特に高い教員を半期毎20名程度選んで「共通教育賞」を贈っているが、その受賞教員名と受賞理由が列記されている。そのうち3名の受賞教員による具体的な授業方法も紹介されている。

FD 活動報告（2011年度）◆

分　類
1　本学 FD 事業関係
2　学外における FD 活動
3　FD 関係会議

1　本学 FD 事業関係

実施時期	活動内容等	実施組織等	概　　要
3月	2011年度 新任教員対象 FD ガイダンス	総務部主催	新任教員に対し、本学 FD 事業のガイダンス実施（懇談含む）
4月	2011年度 新入生アンケートの実施	教育・研究推進センター	新入生全員に対するアンケートを実施
	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』 第25号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第25号の配信
5月	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』 第26号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第26号の配信
6月	授業アンケート実施科目の確認	全学部学科 教育・研究推進センター	全科目担当者に対する問合せ及び学部学科での確認作業
	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』 第27号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第27号の配信
7月	第7回　FD-YG 会の開催	教育・研究推進センター	話　題　「どうする？キャリア教育」 参加者　20名　（職員含む）
	2011年度春学期授業 アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	実施期間　7月18日（月）～7月29日（金）　予備週含む
	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』 第28号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第28号の配信および嘱託講師への配布
8―9月	2011年度春学期授業 アンケート実施結果の フィードバック	全学部学科 教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2011年度春学期授業 アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果（全科目）を公開
	2011年度 FD 講習会・情報交換会の 開催	教育・研究推進センター	講演　『キャリア教育について考える』 講師　葛城浩一氏　香川大学　教育・学生支援機構 / 大学教育開発センター准教授 参加者61名 (職員含む)
	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』 第29号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第29号の配信および嘱託講師への配布
10月	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』 第30号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第30号の配信および嘱託講師への配布
11月	2011年度在学生 アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	在学生全員に対するアンケート調査を実施
	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』 第31号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第31号の配信および嘱託講師への配布

実施時期	活動内容等	実施組織等	概　　要
12月	2011年度秋学期授業アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	実施期間　1月6日（金）～1月25日（水）　予備週含む
	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』第32号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第32号の配信および嘱託講師への配布
	授業参観	授業公開教員　授業参観教員 教育・研究推進センター	授業参観の実施（京田辺・今出川両キャンパスにて）
1月	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』第33号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第33号の配信および嘱託講師への配布
	授業参観　フィードバック	授業公開教員 教育・研究推進センター	授業公開された教員に、授業参観教員のコメントをフィードバック
2月	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』第34号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第34号の配信および嘱託講師への配布
	2011年度秋学期授業アンケート実施結果のフィードバック	全学部学科 教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2011年度秋学期授業アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果（全科目）を公開
	第8回　FD-YG 会の開催	教育・研究推進センター	話　題　「大学院の FD を考える」 参加者　13名（大学院生、教員、職員含む）
3月	FD 広報 メルマガ『同女FDニュース』第35号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第35号の配信および嘱託講師への配布
	FD レポート第５号の発行	教育・研究推進センター	全専任教員および各部署に配布

2　学外における FD 活動

実施時期	活動内容等	参加者等	概　　要
5月	2011年度 FD 講習会打ち合わせ	センター次長	香川大学にて実施
9月	大学コンソーシアムひょうご神戸第6回FD・SD セミナーへの参加	本学教員	神戸大学百年記念館　六甲ホールにて開催
10月	同志社大学 PBL 推進支援センター2011年度第１回フォーラムへの参加	センター所長、教務次長	同志社大学　新町キャンパス　臨光館301番教室にて開催
12月	第7回龍谷大学FD フォーラム2011への参加	センター次長	龍谷大学　深草キャンパスにて開催
2月	同志社大学 PBL 推進支援センター2011年度第３回シンポジウムへの参加	センター所長	テーマ :「誰が何をいかに評価するのか ?」 同志社大学にて開催
3月	大学コンソーシアム京都第17回 FD フォーラムへの参加	教員、職員	テーマ :「大学におけるキャリア教育を考える」 京都産業大学にて開催 参加者　22名

3　FD 関係検討会議等

実施時期	活動内容等	実施組織等	概　　要
4月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2011年度春学期授業アンケートについて
			在学生アンケートの実施結果について
5月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2010年度在学生アンケートの実施結果について
6月	FD 推進事業内容について	センター主任会	第７回 FD-YG 会について
			2011年度春学期授業アンケートについて
			2012年度在学生（新入生含む）アンケートについて
7月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2011年度 FD 講習会について
			2011年度新入生アンケートについて
			2011年度授業アンケートについて
9月	FD 推進事業内容について	センター主任会	FD レポート第５号について
			2011年度秋学期授業アンケートについて
			2011年度授業参観について
			2011年度 FD 講習会について
			DoRIS について
10月	FD 推進事業内容について	センター主任会	FD 講習会　実施報告書について
			在学生アンケートについて
11月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度授業アンケートについて
			在学生アンケートについて
1月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度 FD 講習会　講師・テーマについて
			第８回 FD-YG 会について
			2012年度新入生・在学生アンケートについて
			2012年度 FD 事業の概要について
			2012年度 FD 事業日程について
2月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度 FD 講習会　講師・テーマについて
3月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度授業アンケートについて

メルマガ「同女 FD ニュース」の発行報告◆

2011

月	ニュース	トピックス
4月	「FD レポート第4号」の発行について	FD 関係資料の紹介
	2011年度新任教員入社前オリエンテーションの実施（FD ガイダンスを含む）について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2011年度 FD−YG 会のテーマ募集について	
5月	2011年度春学期授業アンケート実施科目調査書の配布について	FD 関係資料の紹介
	2010年度秋学期「成績平均点・合格率」等の配布について	FD 関係セミナー、講演会の案内
6月	第7回 FD-YG 会の開催について	FD 関係資料の紹介
	「HP 教員紹介」及び「The Dreams of DoRIS」 校正ゲラの送付について	FD 関係セミナー、講演会の案内
7月	2011年度春学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
	第7回 FD-YG 会の開催について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2011年度 FD 講習会の開催について	
8月	休　　刊	休　　刊
9月	2011年度春学期授業アンケート実施結果について	FD 関係資料の紹介
	2011年度 FD 講習会の開催について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	第7回 FD−YG 会の開催報告について	
10月	2011年度春学期授業評価報告について	FD 関係資料の紹介
	2011年度 FD 講習会の開催報告について	FD 関係セミナー、講演会の案内
11月	2011年度秋学期授業アンケート実施科目調査について	FD 関係資料の紹介
	2011年度在学生アンケートの実施について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	教員研究・教育活動等報告書2011について	
	2011年度春学期「成績平均点分布・合格率」等の配布について	
12月	2011年度授業参観について	FD 関係資料の紹介
	2011年度在学生アンケートについて	FD 関係セミナー、講演会の案内
	教員研究・教育活動等報告書2011について	
1月	2011年度秋学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
	教員研究・教育活動等報告書2011について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2011年度在学生アンケートについて	
2月	第8回 FD-YG 会の開催について	FD 関係資料の紹介
		FD 関係セミナー、講演会の案内
3月	2011年度秋学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
	第8回 FD-YG 会の開催報告について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	第17回 FD フォーラムについて	

2012年度 FD 事業の概要・日程◆

FD 事業概要

Ⅰ　教育活動の公表

1．本学教員の教育活動について研究活動とともに、「教員研究・教育活動等報告書」として冊子で公表する。学生は図書館で閲覧可能。（年 1 回発行）
2．本学教員の教育活動は、研究活動とともに、当センターホームページ上で学内外に公開する。

Ⅱ　授業アンケートの実施とフィードバック（科目区分代表者及び個々の教員へ）

3．「学生による授業評価」として授業アンケートを春秋年 2 回実施する。
4．「科目区分代表者及び科目担当者へのフィードバック」として、授業アンケート実施結果、及び同一科目区分の学生評価平均値及び大学全体の学生評価平均値データをフィードバックする。（春秋年 2 回）
5．「授業の改善状況把握」 教員個々の授業アンケート実施結果を蓄積管理する。（紙、電子データ）

Ⅲ　授業評価報告の作成と公開

6．学生による授業アンケートの結果に対して科目担当者及び科目区分代表者がコメントを記載し、「授業評価報告」として図書館で公開する。（春秋年 2 回）

Ⅳ　教員による授業参観の実施

7．授業の改善を目的として「教員による授業参観」を実施する。

Ⅴ　FD 関係講習会等の開催・案内

8．本学主催 FD 関係講習会等を開催する。
9．学外で開催される FD 講習会等を学部学科、関係教員に案内し、FD に対する意識向上に努める。

Ⅵ　新任教員 FD ガイダンス

10. 本学 FD 事業に関わるガイダンスを、総務部が所管する入社前オリエンテーションの中で行う。

Ⅶ　新入生・在学生アンケート

11. 学生生活全般にわたる満足度、学業等における成長度、教育改善（FD）効果、本学への帰属意識等の実態について経年で把握できるようにする。

Ⅷ　FD の啓発・広報関係事業

12. FD 啓発誌「FD レポート」（旧 FD フォーラム）を発行する。（年 1 回）
13. メルマガ《同女 FD ニュース》を配信する。（月 1 回配信）
14. 当センターの FD 事業内容及び FD 活動報告を本学ホームページ上で情報を公開する。

Ⅸ　教育開発・研究会等に関わる支援

15. 教育開発・各種研究会への支援（2011年度「FD-YG 会」、2010年度「FD-YG 会」、2009年度「FD-YG 会」「GPA 検討会」、2008年度「FD-YG 会」、2006～2007年度「e-learning 研究会」、2006年度「授業アンケート研究会」）

Ⅹ　大学院 FD 推進事業

16. 大学院における FD を推進する。
　・大学院生に対する満足度調査の実施について検討する。
　・その他の FD 活動（学部教育における FD 活動で対応）

Ⅺ　その他 FD 関係の支援

17. FD 関係図書・資料等を収集し　教職員への貸し出し・利用に提供する。
18. FD 関係講習会等の参加費・出張費等を補助する。
19. その他、本学 FD に関すること。

2012年度　FD 事業日程（予定）

春学期

3 月	・新任教員入社前オリエンテーション　FD ガイダンスの実施 （開催日：3 月28日開催）
4 月	・新入生アンケートの実施
5 月	・春学期授業アンケート実施科目の確認
7 月	・春学期授業アンケートの実施　　7 月 9 日（月）～30日（月）
8 月	・授業アンケート実施結果のフィードバックとコメント依頼 ・授業アンケート集計結果（冊子）配布 ・授業評価報告（アンケート集計結果）を図書館にて公開（速報）
9 月	・FD 講習会 ・春学期授業評価報告（コメント）の回収 ・授業評価報告（コメント添付済み分）を図書館にて公開 ・HP 教員紹介公表

秋学期

10月	・秋学期授業アンケート実施科目の確認
11月	・教員相互による授業参観の実施 ・在学生アンケートの実施
1 月	・秋学期授業アンケートの実施　　1 月 7 日（月）～25日（金）
2 月	・授業アンケート実施結果のフィードバックとコメント依頼 ・授業アンケート集計結果（冊子）配布 ・授業評価報告（アンケート集計結果）を図書館にて公開（速報） ・秋学期授業評価報告（コメント）の回収 ・授業評価報告（コメント添付済み分）を図書館にて公開
3 月	・大学コンソーシアム京都主催「FD フォーラム」への参加 （各学科 2 名以上の参加を依頼） ・「教員研究・教育活動等報告書」の発行 ・「FD レポート第 6 号」の発行

年間を通して

◎「FD-YG 会」及び教育開発に関わるセミナー・研究会を支援
◎学外で開催される FD 関係講習会等を案内、参加費・出張費等の補助
◎ FD 関係資料・図書等を収集、貸し出し
◎メルマガ「同女 FD ニュース」を配信（月 1 回配信）
◎ FD 活動報告を当センターホームページ上で掲載（毎月更新）

編集後記

入学してきた学生に満足してもらえるように教育内容の充実をはかることは、大学がなすべき当然の使命である。本学では、教育・研究推進センターが中心となって、FD を強化・推進するために、さまざまな試みをしてきた。

９月に開かれた FD 講演会では、香川大学の葛城浩一先生から「キャリア教育について考える」というテーマで、お話をしていただいた。キャリア教育とは、単に卒業時の就職の問題をいうのではなく、今後、どのように生きていくかという、各自の生涯にわたる重要な問題であることを確認した。講演の後、学科別に、「キャリア教育」に関して、どのような内容や構成が考えられるか？　それを阻害する要因は何か？をめぐって、グループワークをおこなった。職業教育とリベラル・アーツは共存するのかということも話題にのぼった。

今年度も FD-YG 会が２度もたれた。７月に、「どうする？キャリア教育」であり、本学のキャリア教育の取り組みである DWCLA10（卒業までに身につけさせたい「分析力」「思考力」「創造力」など10の項目）について、討論をした。さらに、２月に、「大学院の FD を考える」というテーマで、研究科を越えて、院生もまじえて、本学の大学院のかかえている諸問題についての意見交換がなされた。

その他、FDに関する学内・学外の各種の事業・活動があった。本誌にその詳細が紹介・記録されている。

専任教員の職務は、教育・研究・行政の３要素があるという。大学人に課せられた責任は大きい。FD 関係の催し物に参加して、他者の教育のあり方に共感し、教えられることも多々ある一方、今後の教育は、こうでなければならないというような画一化、型はめを求められているのではないのかという危惧の念をいだくこともある。教育の画一化は、個性の喪失につながる。大学には、個性ゆたかな人間（教員も学生も）いていいと、わたし個人は考える。FD の過剰な強化は、個性を封印することにならないかという気もする。批判精神や創造力は、個性をうみだす源である。就職活動をする学生の黒のスーツとマニュアル化した物言いは、没個性の象徴である。そういえば、最近、私学の在野性をいうことばを耳にしなくなった。

本誌への寄稿、編集に協力くださった方々にお礼もうしあげる。

教育・研究推進センター主任　**村木新次郎**

ＦＤレポート　　第５号

2012年　３月　発行
同志社女子大学　教育・研究推進センター
〒610-0395　京都府京田辺市興戸
TEL (0774) 65-8679　FAX (0774) 65-8680
E-mail:kyoiku-i@dwc.doshisha.ac.jp
ホームページ　http://www.dwc.doshisha.ac.jp